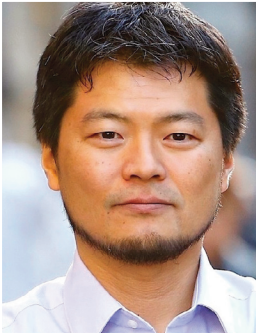


제16회 평화와 번영을 위한 제주포럼
JEJU FORUM 2021
FOR PEACE & PROSPERITY

지속가능한 평화, 포용적 번영
Sustainable Peace, Inclusive Prosperity



마스다 하지무

Masuda Hajimu

국립 싱가포르대학교 교수

National University of Singapore, Professor

토론문

‘사회 전쟁’의 시점에서 학살 사건을 재고하다

「社会戦争」視点から虐殺事件を再考する

益田肇

シンガポール国立大学

済州フォーラムに招いていただきありがとうございます。シンガポール国立大学歴史学部の益田肇と申します。専門は、二〇世紀アジア史、また朝鮮戦争や冷戦の歴史です。より最近では、私が「社会戦争」と呼ぶところの、普通の人びとの日常生活のなかにおけるさまざまな闘いに焦点を当てて、冷戦世界とその歴史を再考することに取り組んでいます。

ここでは、まずパク・テギョン教授の発表への討議から始めたいと思います。この発表のなかで、もっとも秀逸だと感じたのは、済州島四・三事件を再検討するにあたってのパク教授のアプローチです。彼は、この事件を単に韓国史における出来事として捉えるのではなく、世界史の枠組みのなかで捉え直し、ベトナムやインドネシアで発生した虐殺事件に重ね合わせながらアプローチしています。

まず冒頭でパク教授は、済州島事件の本質とその規模が、過去二〇年間の調査を経てもなお完全には解明されていない、と指摘しています。そして、この事件への考えを深めるために、ベトナムとインドネシアで発生した虐殺事件、とくにベトナム戦争のさなか米軍と韓国軍が行った虐殺事件とインドネシア虐殺事件(1965–1966)を紹介しています。

いずれの場合においても、パク教授は国家の果たした役割 — 例えば、メディア操作やプロパガンダを通して人びとを動員し、虐殺の舞台を作り上げたこと、さらにはさまざまな虐殺事件を実行し、また事後にはそれを隠蔽したこと — を強調しています。それゆえ結論としては、国家の責任をきちんと追求すること、また真実と補償の必要性を説いています。そして最後に、少し唐突ながらも、もう一つの重要な側面、つまり済州島事件をめぐる社会紛争や歴史的抗争について、さらに学術的研究を深めることも呼びかけています。

ディスカッサントとして、私のこの議論を二つの方法で、より展開させていきたいと思います。一つは、比較の範囲を広げること、もう一つは、パク教授の最後のポイントである社会的抗争の側面をより真摯に考えていくことです。では一つずつ説明していきたいと思います。まず、パク教授は済州島事件をベトナムやインドネシアの虐殺事件と比較して検討していますが、私はこの比較の範囲を広げて、世界各地で発生したさまざまな社会的鎮圧をも比較対象に取り上げることを提案します。そうした社会的鎮圧に挙げられるものには、例えば、さきに名前の挙がったインドネシア大量殺戮事件に加えて、米国のマッカーシズム、日本のレッドパージ、台湾の白色恐怖、フィリピンにおけるフク団の反乱の鎮圧などの事例があります。

これらの歴史的出来事を「社会的鎮圧」と呼ぶことに驚かれる方もいらっしゃるかもしれません。なぜなら、これらの出来事は通常、「政治的鎮圧」、より具体的には、冷戦の真っ只中に発生した反共弾圧の典型的な事例と考えられてきたからです。たしかに常識的見解からすれば、これらは冷戦時代の弾圧に他ならないようにみえると思います。しかし、社会的抗争や歴史的対立といった側面に注目しながら、それぞれのケースをよく見てみると、それらはまったく違って見えてくるのです。

例えば、米国のマッカーシズム。一般には、反共主義政治の典型的ケースと思われるがちですが、その被害者をよく調べてみると、彼らが必ずしも共産主義者や共産主義シンパではなかったことがすぐに分かります。こうした犠牲者には、むしろ、アフリカ系アメリカ人、公民権運動家、労働運動家、フェミニスト運動家、ゲイやレズビアン、公営住宅や国民皆保険制度などのニューディールプログラムの提唱者などが多かったのです。

これらの多様な人びとが共有していたのは、共産主義イデオロギーなどではありません。むしろ大恐慌や第二次世界大戦から生まれ出た、さまざまな社会変化の要素を体現していたことだ、と言えると思います。つまり、社会的な視点に立てば、マッカーシズムとは、第二次世界大戦後の混沌のさなか、さまざまな意見の相違を封じ込め、それらを抑え込むために広がった、ある種の土着主義的な巻き返し—つまり社会保守主義的な社会現象—と見ることができるのです。

ここでは、日本、台湾、フィリピン、また世界各地でのほかの事例について触れるだけの時間がないのですが、英語版と日本語版の私の著書では、それぞれの事例を検証して、それらを「社会戦争」という世界的現象の一部であると述べています。そこでは、今日の世界なら「草の根保守」とでも呼ばれる普通の人びとが、社会の「秩序」と「調和」を維持するために、いかにさまざまな意見の相違や社会変化の要素を「冷戦」の名のもとに封じ込めたかが議論されています。

さきに名前の挙がったインドネシア虐殺事件(1965-1966)自体は、私の著書には含まれていません。しかし、私の新しいプロジェクト「冷戦の再認識：アジアにおける経験から考える」では、インドネシアの学者たちと共同研究を重ね、インドネシア虐殺事件の社会的観点からの再検討を手掛けてきました。この事件でも、国家、特に軍隊が重要な役割を果たしたことには疑いの余地はありません。しかし、我々の研究はそれだけではなく、さまざまな社会的対立、またローカルな問題にも光を当てています。そうしたものには、例えば、村内や近所内部における政治

的、経済的軋轢、さらにはジェンダー的、宗教的、民族的な対立、また個人的な諍いなども含まれています。

つまり、比較対象を広げて済州島事件をこうした社会的鎮圧と並べてみると、そこには相違点というよりも共通点の方が多いのではないかと考えられると思います。そして、こうした認識こそが、パク教授が指摘した最後のポイント、つまり社会的抗争や歴史的対立といった側面を直視することへの必要性について、より真剣に考え直させることになるのではないのでしょうか。

こうした点を念頭に置いてみると、さまざまな疑問がわきあがってきます。冷戦という名のもとで、実際には一体なにが人びとの間で争われていたのだろうか――と。例えば、次のような問いかけを挙げることができます。戦後朝鮮半島で生じたさまざまな対立は、本当にイデオロギーの違いからのみ生まれたものだったのか。大量殺戮は本当に国家権力と民衆(島民)の間のみで行われたのか。済州島には、社会的、文化的、地域的な対立はなかったのか。

つまり、「冷戦対立」という名のもとに、どのような社会的、文化的、地域的、またはジェンダー的、さらには世代的な対立が内在していたのだろうか。仮にイデオロギーが重要であったとしても、個々人のどのような心情が「イデオロギー」という形をとって現われていたのだろうか。例えば、左翼思想に興味を持つ人はどのような人びとで、事件発生前には彼らに対しどのような反応があったのだろうか。約言すれば、私が興味を持っているのは、事件の前後において、実際の現場では何が起きていたのか、人びとの間では何が起きていたか、ということです。

私がこうした点を強調するのは、第二次世界大戦後の世界において、朝鮮半島、そして韓国社会は、世界各地の社会と同様、激烈的な社会変化を経験していたからです。これはとくに済州島によく当てはまることです。というのは、日本植民地時代ののち、済州島には何千、何万もの島民が日本から戻ってきていたからです。

実際のところ、植民地時代には多くの島民が日本に渡っていました。とくに大阪—私の生まれ故郷ですが—では、済州島民が当地朝鮮人の大半を占めていたぐらいです。

そこで、戦前大阪における朝鮮人労働運動の歴史や、それへの朝鮮人女性の積極的な参加を考えてみれば、彼らが戦後、新しい習慣や文化、新しい社会運動の在り方、また新しいジェンダー概念を、島に持ち帰っていたとしてもまったく不思議ではありません。さらに、そうしたすべてが同島における社会変化の萌芽となり、また同時に社会的緊張の火種となったとしても、そしてそれが朝鮮半島の他地域よりも激しい度合いで起きていたとしても、まったく驚くべきことではないと思います。

このように、比較対象の範囲を広げ、社会的対立という側面に焦点を当ててみることで、済州島事件を二〇世紀グローバルヒストリーという広い枠組みのなかに位置づけることができるだけでなく、済州島事件の性質そのものに関する新たな見解を生み出すことができるかもしれません。私はこれまで韓国の方との共同研究を立ち上げたことはありませんが、今後、こうした研究を、済州島や韓国の研究者と進めていくことができればとても喜ばしいと思います。

ご清聴ありがとうございました。